東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

育てにくさを抱える保護者への臨床心理学的支援について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-03-15 キーワード (Ja): キーワード (En): difficulty in raising children, support for parents 作成者: 小柳,菜穂, 橋本,創一, 前田,詩奈, 田中,里実, 田口,禎子, 堂山,亞希, 秋山,千枝子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00173613

東京学芸大学紀要　総合教育科学系　73：755－763, 2022

育てにくさを抱える保護者への臨床心理学的支援について

小柳　菜穂*1・橋本　創一*2・前田　詩奈*2・田中　里実*3・田口　禎子*4
堂山　亞希*5・秋山　千枝子*6

特別支援教育・教育臨床サポートセンター

（2021年9月13日受理）

1　はじめに

厚生労働省は，母子保健は子どもたちが健やかに成長していくうえでの出発点であるとし，その基盤作りとして平成13年から「健やか親子21」を開始し，平成27年からは現状の課題を踏まえた「健やか親子21（第2次）」を開始した。「健やか親子21（第2次）」は，重点課題のひとつとして「育てにくさを感じる親に寄り添う支援」を設定した。育てにくさを「子育てに関わる者が感じる育児上の困難感」と定義し，その要因として，子どもの心身状態や発達特性などの子どもの要因，親の病気やパーソナリティなどの親の要因，愛着の問題などの親子関係に関する要因，家計や周囲からの支援などの環境に関する要因の4つを挙げている（厚生労働省，2014）[1]。山縣（2016）[2] によると，子どもに対して育てにくさを「いつも感じる」「時々感じる」と回答した親に対し，育てにくさを感じた際の相談先や，何らかの解決する方法を知っているか問う項目では，3・4ヶ月児では14.5%，1歳6ヶ月児では15.9%，3歳児では15.6%が「いいえ」と回答している。このことから，子どもに対して育てにくさを感じていても対処できない親が一定数存在することが示された。また，このような親について，近年では育児中の家庭の孤立も指摘されており，子育てに関する不安や困難感を抱え込むおそれがあるとされている。その結果，親が子育てに拒否的になることも想定され，育てにくさを感じる親に対する支援は重要な課題であるといえるだろう。

親が感じる育てにくさは，子どもの発達によるものから支援の不足によるものまで多面的な要素を含んでおり，支援の際には親の発する育てにくさのサインに気づき，子ども，親，親子関係の多様性を包容する姿勢が求められる（厚生労働省，2014）[1]。さらに，支援の際には，心理や医療，福祉，行政など，様々な分野が連携して包括的に進めることが求められ，支援者は親が感じる育てにくさについて，単一の要因のみが存在すると考えるのではなく，4つの要因から問題を捉えて整理し，他機関との適切な連携を行いながら支援していくことが重要であると考える。

渕上（2020）[3] は，育てにくさを感じる親の支援を行う保健センター等の保健師，児童発達支援センターの職員にアンケート調査を行い，支援者が感じる育てにくさの要因や,実際に行われている支援について明らかにした。その結果，保健センター，児童発達支援センターではそれぞれの専門性に基づき，子どもとその家族，地域全体に対して支援を行っており，支援者の多くが育てにくさの4つの要因を参考に支援を行っていることが明らかになった。

保健センターや児童発達支援センターの他に，幼稚園・保育園も支援の場として挙げられる。保育所保育指針の第4章[4] には子育て支援について記載されており，保育士の専門性と保育所の特性を生かして保護者

＊1　東京学芸大学大学院 教育学研究科
＊2　東京学芸大学 特別支援教育・教育臨床サポートセンター（184-8501　東京都小金井市貫井北町4-1-1）
＊3　東京学芸大学大学院 連合学校教育学研究科
＊4　駒澤女子短期大学 保育科（206-8511　東京都稲城市坂浜238）
＊5　目白大学 人間学部 子ども学科（161-8539　東京都新宿区中落合4-31-1）
＊6　あきやま子どもクリニック（181-0012　東京都三鷹市上連雀4-3-3川口ビル1F）

が子育ての喜びを感じられるよう努めることや，日常の保育に関連した機会を活用して保護者との相互理解を図るよう努めることなどが示されている。また，支援の際には地域の関係機関との連携及び協働を図ることが求められている。幼稚園における子育て支援についても，保護者や地域の人々に対して幼稚園の機能や施設を開放し，幼児期の教育のセンターとして役割を果たすことが求められている。さらに，支援の際には「親と子どもが共に育つ」という観点から，保護者が育児不安やストレスを解消し，子どものより良い育ちを実現するよう支援を行う必要があるとされている（文部科学省，2008）[5]。これらのことから，幼稚園・保育園は育てにくさを抱える保護者への支援において，重要な役割を担っているといえる。日々親子と関わる幼稚園教諭・保育士が，育てにくさを感じる保護者に対しどのような視点から支援をしているかを明らかにすることで，子育てに寄り添った心理社会的支援についてより検討していくことができると考えられる。

そこで本研究は，支援者の活動フィールドによって育てにくさの実態について4つの要因から検討し，幼稚園・保育園は育てにくさを感じる保護者に対してどのような支援を行っているのか整理し，子育てに寄り添う心理社会的支援について検討することを目的とする。

2　方法

2．1　調査期間

2019年6～7月に実施した。

2．2　調査対象・方法

関東地方の公立幼稚園及び1都3県の公立保育園（984園）の児童発達支援センター等に通っている3歳児を担任・担当している幼稚園教諭または保育士。また，研究倫理を遵守し，協力者には書面にて研究趣旨を説明し，了解を得た上で調査への参加を依頼した。回答のあった257施設259名を分析対象とした。なお，本調査は東京学芸大学研究倫理委員会承認［152］のもとに実施した。

2．3　調査内容

幼稚園・保育園を利用する育てにくさを抱える保護者の支援の現状や育てにくさの要因を把握するための質問紙を作成した。質問紙の調査項目は，（1）フェイスシート，（2）幼稚園・保育園を利用する3歳児の保護者（母親）についてである。

（1）フェイスシート

対象者の属性（幼稚園教諭・保育士）について選択式で，職業経験年数（2020年3月時点），クラスの子どもの人数について記述式で回答を求めた。

（2）幼稚園･保育園を利用する3歳児の保護者（母親）について

幼稚園・保育園を利用する育てにくさを抱える3歳児の保護者（母親）について，近年の保護者の傾向，幼稚園・保育園で行っている支援，育てにくさにおける4つの要因について回答を求めた。回答に際し，育てにくさとは「健やか親子21（第2次）」で定義されている“子育てに関わる者が感じる育児上の困難感”であるとし，その背景には，子どもの要因，親の要因，親子関係の要因，環境の要因の4つの要因があることをあらかじめ提示した（表1）。また，3歳児がいない場合には，4歳児について回答しても構わないものとした。

表1　育てにくさにおける要因の項目一覧

子どもの要因	障害について（身体障害・発達障害・知的障害・難病等） 全般的な発達の遅れについて 言葉の発達の遅れについて 身体発育・運動発達の遅れについて 健康面について（病弱・アレルギー等） 睡眠について（寝つきが悪い・夜中に起きてしまう等） 食事について（偏食が著しい・食欲に偏りがある等） 排泄について かんしゃくやそれに伴う行動について（感情のコントロール） 落ち着きのなさ・乱暴について コミュニケーションについて（対人関係・友人関係等） こだわりについて 不安が強い（人/場所見知り等） 母子分離ができない その他
親の要因	ネットや育児雑誌の情報に振り回されている 身体障害・難病などの重い身体疾患がある，または疑われる 知的障害がある，または疑われる 発達障害がある，または疑われる 精神障害・精神疾患がある，または疑われる 若年での妊娠・出産から親としての自覚が低い，または子育てスキルが著しく低い DV（ドメスティック・バイオレンス）を受けている 子どもへの愛情が薄い，または強すぎる 孤立している（近くに親類や相談できる人がいない） 依存症（の傾向がある）―喫煙，飲酒，携帯ゲーム，ギャンブル等― その他
親子関係の要因	愛情が薄い親と親を求めない子ども，または甘えが強い子ども 愛情が強すぎる親と親を求めない子ども，または甘えが強い子ども 心配性の親と上手くできない子ども，または反発する子ども 楽観的な親と上手くできない子ども，または反発する子ども 理想を押し付ける親と上手くできない子ども，または反発する子ども 批判的で子どもを悪く言う親と上手くできない子ども，または反発する子ども 過保護・過干渉な親と過剰に従ってしまう子ども，または反発する子ども その他
環境の要因	家計が苦しい（貧困家庭） 転居してきたばかりで知り合いがいない，または転居が多い ひとり親家庭（単身赴任・未婚・離婚等） 父親と母親の仲が悪い，または連携がとれていない 両親ともに忙しい（休日も仕事がある） 子連れの再婚（前婚姻者との子どもがいる・異父母兄弟がいる等）で家庭が不安定 保護者が不安定な就労や転職を繰り返している 保育・教育環境が子どもに適していない 保育所に入れない 親と考えや意見が異なる祖父母の介入が多い 兄弟が多い その他

3　結果

3．1　フェイスシート

回答者259名の属性は，幼稚園教諭137名（52.9%），保育士114名（44%），重複回答（幼稚園教諭・保育士の両方に該当する者）2名（0.8%），未回答6名（2.3%）であった。職業経験年数については246名から回答が得られ，平均15.5年（SD=10.0），中央値14年，最頻値3年であった。クラスの人数については251名から回答が得られ，平均19.6人（SD=6.2）であった。

3．2　幼稚園･保育園を利用する3歳児の保護者（母親）について

3．2．1　近年の保護者の傾向

近年の傾向として，育てにくさを抱える保護者（母親）が増えているか尋ね，252名から回答が得られた。その結果，「少し増えている」が121名（46.7%），「増えている」が97名（37.5%），「変わらない」が18名（6.9%），「わからない」が15名（5.8%），「減っている」が1名（0.4%）であり，「少し減っている」と回答した者はいなかった。

3．2．2　幼稚園・保育園で行っている支援

幼稚園・保育園において，育てにくさを抱える保護者に対してどのような支援を行っているか尋ねたところ，258名から回答が得られた（複数回答可）。その結果を図1に示す。「定期的な面談」161件（62.4%），「巡回相談の案内」129件（50.0%），「他の専門機関の紹介」145件（56.2%），「他機関との連携」131件（50.8%），「保護者懇談会などの案内」35件（13.6%），「保護者への声かけ･情報共有」27件（10.5%），「その他」3件（1.2%）であった。「その他」の具体的な内容としては，ケースカンファレンスやコンサルテーションが挙げられた。

「他の専門機関の紹介」の具体的な紹介先としては，児童発達支援センターが63件（43.4%），療育（療育機関・療育施設）が18件（12.4%），保健センターが15件（10.3%），医療機関が10件（6.9%），相談事業が10件（6.9%），行政（市役所・区役所）が6件（4.1%），言葉の教室が6件（4.1%），子ども家庭支援センターが5件（3.4%），教育センターが4件（2.8%），教育相談が2件（1.4%），福祉事務所が2件（1.4%），保健所が2件（1.4%），その他が6件（4.1%）であった（複数回答可）。その他にはスクールカウンセラーなどが挙げられた。

「他機関との連携」の具体的な連携先としては，児童発達支援センターが44件（33.6%），療育関係が15件（11.5%），保健センターが11件（8.4%），行政が10件（7.6%），子ども家庭支援センターが7件（5.3%），児童相談所が7件（5.3%），特別支援学校が6件（4.6%），保健師が5件（3.8%），巡回相談が5件（3.8%），教育相談が4件（3.1%），教育委員会が3件（2.3%），スクールカウンセラーが3件（2.3%），その他が25件（19.1%）であった（複数回答可）。その他には，NPO法人や医療機関，教育センター，民生委員，幼児教室，言葉の教室，小学校，通級指導教室，ファミリーサポートなどが挙げられた。

3．2．3　育てにくさにおける4つの要因について

育てにくさの，子ども，親，親子関係，環境の4つの要因について，よく見られるものの選択及び1位から5位までの順位付けを求め，1位が5点から5位が1点となるように順位を点数換算し集計した。なお，回答者の職業経験年数の平均が15年，最頻値が3年と幅が

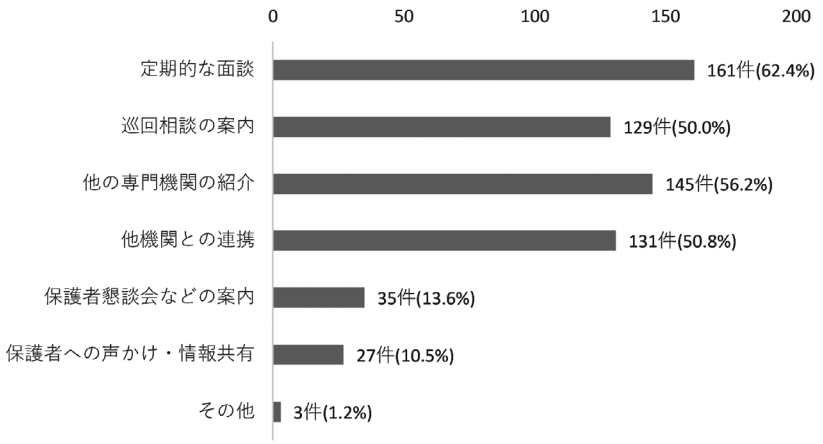

図1　幼稚園・保育園で行っている支援

あったため，職業経験年数が5年以下とそれ以外を分けて分析したところ，違いは見られなかった。よって，職業経験年数による群分けは行わず，一括して分析を行った。

子どもの要因では「かんしゃくやそれに伴う行動について」577ptが最も多く，続いて「落ち着きのなさ・乱暴」489pt，「コミュニケーション」462ptが多かった（図２）。

親の要因では，「孤立している」633pt，「子どもへの愛情が薄い，強すぎる」624pt，「情報に振り回されている」475ptが多く挙げられた（図３）。

親子関係の要因では，「心配性の親と上手くできない/反発する子ども」621ptが最も多く挙げられ，続いて「過保護･過干渉な親と過剰に従う/反発する子ども」573pt，「理想を押し付ける親と上手くできない/反発する子ども」565ptが多く挙げられた（図４）。

環境の要因としては，「両親ともに忙しい」488pt，「父親と母親の仲が悪い」450ptが多く挙げられた（図５）。

４　考察

日々，保護者と子どもに接している幼稚園教諭・保育士の80%以上が，近年育てにくさを抱える保護者が「少し増えている」，「増えている」と回答しており，支援の重要性が改めて示された。

育てにくさを抱える保護者に対し，幼稚園・保育園では，「他の専門機関の紹介」，「他機関との連携」，「巡回相談の案内」などの支援が行われており，育てにくさの要因や程度に応じて他の専門機関の紹介・連携を行っていることが明らかになった。また，「定期的な面談」や「保護者懇談会などの案内」，「保護者への声かけ・情報共有」なども挙げられており，日頃から保護者を気にかけ，送迎時などを活用して臨機応変に相談や話に応じる姿がうかがわれた。

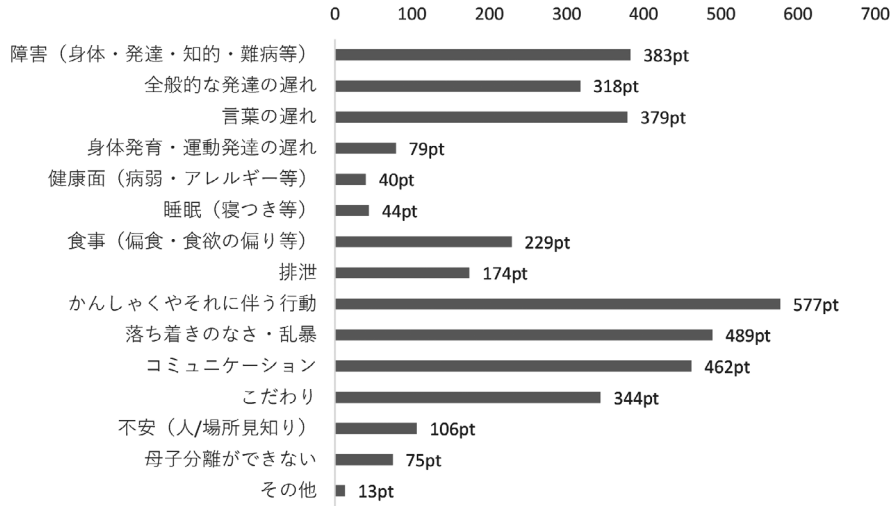

図２　育てにくさにおける子どもの要因

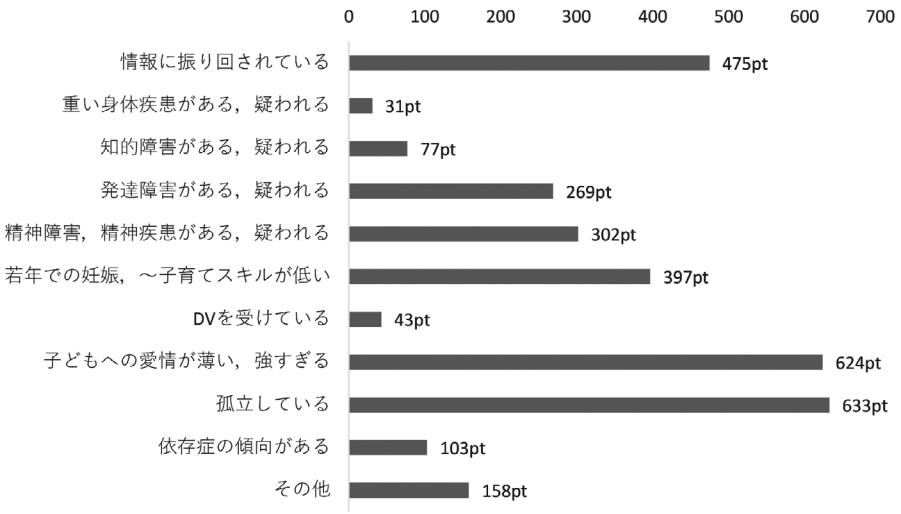

図３　育てにくさにおける親の要因

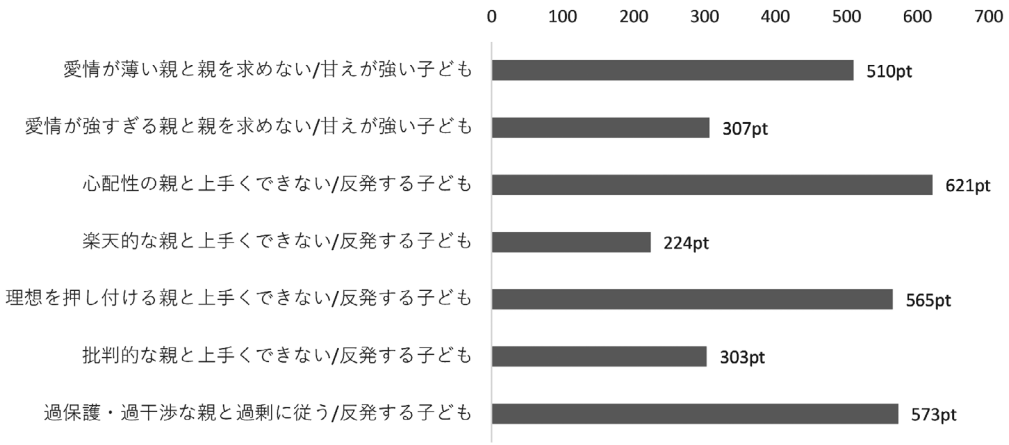

図４　育てにくさにおける親子関係の要因

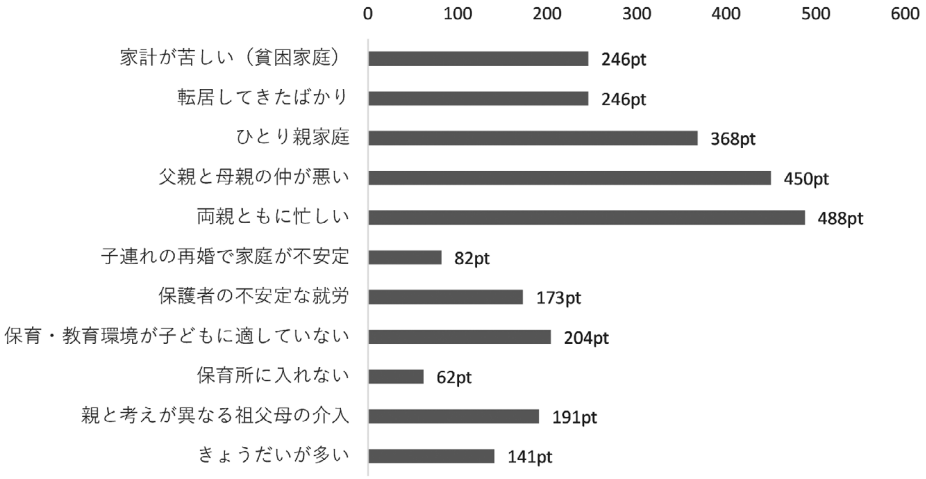

図５　育てにくさにおける環境の要因

幼稚園教諭・保育士がよく見られると考える育てにくさの要因について，子どもの要因では発達障害様症状の行動が多く挙げられた。このような発達障害様症状について，外向的行動を示した際の対応と受容の困難さが，保護者に育てにくさを感じさせることが先行研究において指摘されている（中島ら，2012[6]：今井・古田・佐久間，2018[7]：伊藤・小林，2018[8]：渕上，2020[3]）。また，発達障害は見た目ではわかりにくい障害であるため，家族から理解を得難いこともあり，母親の育児における孤立感を助長し育児におけるストレスが高まることが明らかになっている（渡部・岩永・鷲田，2002）[9]。

親の要因では孤立や子どもへの愛情に関すること，情報に振り回されていることが多く挙げられた。子育ての孤立化の背景には少子化や核家族化の進行，身近な地域に相談できる相手がいないなど近年の社会環境の変化があり（厚生労働省，2014）[10]，育児家庭や母親の孤立が育児不安や育児負担感を増幅させることは先行研究においても指摘されている（荒牧・無藤，2008[11]：佐藤・田髙・有本，2013[12]：申・山田・森岡，2015[13]）。また，家庭内での母親の孤立や父親からのサポートの得られなさも育てにくさや育児不安と関連しているため（川合・庄司ら，1996[14]：武市ら，2005[15]：荒牧・無藤，2008[11]：吉岡ら，2017[16]），支援者は地域におけるネットワーク作りのみならず，父親のサポートを十分に得られるよう支援していくことが求められるだろう。また，近年スマートフォンやSNSの普及により育児の情報源が多様化している（中島・永井，2020）[17]。荒牧・無藤（2008）[11] の調査から，テレビや雑誌・本などから育児に関する情報を得ている母親ほど子どもの育て方/育ちへの不安感が高いことが明らかになっており，子育てに関する不安や疑問を解消するために情報を得ようとし，かえって多様な情報に振り回され育てにくさを感じている可能性も考えられる。

親子関係の要因では「心配性の親と上手くできない/反発する子ども」，「過保護・過干渉な親と過剰に従う/反発する子ども」，「理想を押し付ける親と上手く

できない/反発する子ども」,「愛情が薄い親と親を求めない/甘えが強い子ども」などが多く挙げられていた。これらのことから，親の思いと実際の子どもの姿のギャップが大きい場合に育てにくさを感じさせやすいことが示唆された。

環境の要因では両親の多忙や不仲が多く挙げられた。共働き家庭では仕事と家事・育児の両立に苦労している家庭が多く，子どもと過ごす時間が少ないことは子どもの状態を十分に把握することを困難にし，子どもに対する心配事を抱えやすくなることがこれまでに指摘されている（梅田・島谷・長沼，2017）[18]。青木（2009）[19]は，共働き家庭が協働して育児を行うには，職場が育児を支援しているという雰囲気を感じられることが欠かせず，政府や企業による育児支援制度の利用しやすさを実感できることが重要であると指摘しており，社会全体が連携して子育てを行うという意識が，育てにくさを抱える保護者の支援においても重要であると考えられる。

今回の結果と渕上（2020）[3]の保健センター，児童発達支援センターの職員への調査を比較すると，子どもの要因では共通して発達障害様症状が多く挙げられており，一致した結果が見られた。親の要因では保健師は精神障害，児童発達支援センター職員は発達障害を挙げたが，幼稚園教諭・保育士は孤立や子どもへの愛情について挙げた。また，環境の要因では保健師は貧困家庭，児童発達支援センター職員は親と考えが異なる祖父母の介入等を挙げたが，幼稚園教諭・保育士は両親の多忙等を挙げており，支援者のフィールドによる違いが示された。

保健センターなどにおいて，保健師は母子保健事業を通じて産後うつや精神的不調を早期把握する役割を担っており，児童発達支援センターでは，乳幼児健診や発達相談などで発達の遅れや偏りが見られた子どもとその家族が支援の対象である。これらに対し，幼稚園・保育園を利用する保護者の背景は幅広く，はじめから支援を必要としている場合のみではなく，発達の過程で困難さを感じたり，問題が顕在化したりするケースもある。このような支援の対象となる保護者の違いが，支援者が考える育てにくさの要因の相違点として表れたと考えられる。また，幼稚園教諭・保育士は送迎時や連絡帳でのやり取り，延長保育の利用などから保護者の家庭での様子や就業状況を把握しているため，親の要因で孤立や愛情に関すること，環境の要因で両親の多忙などが多く挙げられたと考えられる。

最後に，育てにくさを抱える保護者に寄り添う心理社会的支援について検討する。本研究の結果から，子どもの行動等についての対処方法が分からず周囲のサポートが得られない状況では，保護者は育てにくさを抱えやすいことが示された。伊藤・小林（2018）[8]は，発達障害の特性のある子どもの母親は，専門職をロールモデルとして関わり方等を学ぶことで子育て方法を獲得し自信に繋がることを示している。幼稚園・保育園においても保育参観等を通して子どもへの対応・支援方法の実際を示すことが求められる。また，情報に振り回され育てにくさを感じている保護者の多さを踏まえ，保護者との面談や声かけを通じた適切な情報提供が求められる。また，野澤・大内・萩原（2019）[20]は，育児の楽しみや悩みを共感し互いに支え合うことができる友人の存在が，育児負担や不安の軽減に重要であることを示している。保護者の孤立の気づき・支援として，行事や懇親会を活用し保護者同士の繋がりを作る取組も一層必要であろう。

5　まとめ

本研究では，幼稚園教諭・保育士を対象に，育てにくさを抱える3歳児の保護者（母親）に対する支援や，幼稚園教諭・保育士が感じる保護者の抱える育てにくさについて調査を行った。

幼稚園教諭・保育士が感じる保護者の育てにくさとその支援について４つの要因から整理した。各要因で顕著なものが抽出されたが，特に子どもの発達障害様症状，子どもへの対応の具体的な助言やサポート，保護者の孤立を防ぐために保護者同士の繋がりを作ることなどが考えられた。しかし，これらの支援は支援者側の経験・知識・スキルなどに頼る側面が大きく，実践方法は未だ確立されていないため，今後さらに検討し支援を充実させることが求められる。

文献

１）厚生労働省:「健やか親子21（第2次）」について検討会報告書，「健やか親子21」の最終評価等に関する検討会，2014. http://sukoyaka21.jp/wp/?page_id=455（参照：2021/09/09）

２）山縣然太朗：「健やか親子21」の最終評価・課題分析及び次期国民健康運動の推進に関する研究　平成25～27年度総括・総合研究報告書，p347，厚生労働科学研究費補助金健やか次世代育成総合研究事業，2016. http://sukoyaka21.jp/pdf/H25-27_yamagata_report.pdf（参照：2021/09/09）

３）渕上真裕美：発達障害児をもつ親が抱える育てにくさの要因と臨床心理学的支援について，東京学芸大学大学院教育学研究科（修士論文），2020.

4）厚生労働省：保育所保育指針，2017. https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000160000.pdf（参照：2021/09/09）
5）文部科学省：幼稚園における子育て支援に関する研修について―研修プログラム作成のために―，子育て支援に関する研修プログラム作成協力者会議，2008. https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2009/03/16/1258023_1.pdf（参照：2021/09/09）
6）中島俊思・岡田涼・松岡弥玲・谷伊織・大西将史・辻井正次：発達障害児の保護者における養育スタイルの特徴，発達心理学研究，23，264-275，2012.
7）今井しのぶ・古田加代子・佐久間清美：子どもの障害に気づき広汎性発達障害と診断を受けるまでの母親の生活上の困難，日本公衆衛生看護学会誌，7（1）3-12，2018.
8）伊藤由香・小林恵子：子どもの発達障害に特性を指摘された母親の子育てにおける体験―発達障害の特性を指摘されてから専門機関の継続的な支援を受けるまで―，日本地域看護学会誌，21（2）22-30，2018.
9）渡部奈緒・岩永竜一郎・鷲田孝保：発達障害幼児の母親の育児ストレスおよび疲労感，小児保健研究，61（4）553-560，2002.
10）厚生労働省：健康長寿社会の実現に向けて～健康・予防元年～　第2部 現下の政策課題への対応　第1章 子どもを産み育てやすい環境づくり，平成26年度版厚生労働白書，2014. https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/14/（参照：2021/09/09）
11）荒牧美佐子・無藤隆：育児への負担感・不安感・肯定感とその関連要因の違い：未就学児を持つ母親を対象に，発達心理学研究，19，87-97，2008.
12）佐藤美樹・田髙悦子・有本梓：都市部在住の乳幼児を持つ母親の孤独感に関連する要因 乳幼児の年齢集団別の検討，日本公衆衛生雑誌，61（3）121-129，2014.
13）申沙羅・山田和子・森岡郁春：生後2～3か月児がいる母親の育児困難感とその関連要因，日本看護研究学会雑誌，38（5）33-40，2015.
14）川井尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・中野恵美子・恒次欽也：育児不安に関する臨床的研究―幼児の母親を対象に―，日本愛育総合研究所紀要，31，27-42，1995.
15）武市知己・小野美樹・小倉英郎・石黒成人・門田正坦・林晶子・藤枝幹也・脇口宏：少子化対策に求められるものは何か？―育児協力や母親の就労状況，育児困難についての質問紙調査―，小児保健研究，64（4）542-551.
16）吉岡京子・鎌倉由起・神保宏子・北澤陽子・白川久美子・大久保詠子・大熊陽子・大屋成子・平林義弘・黒田眞理子：A自治体における要支援児童とその母親の特徴の検討：保健師の判断と組織的検討による児童虐待の可能性の高低に基づく比較，日本公衆衛生看護学会誌，6（1）10-18，2017.
17）中島千英子・永井由美子：母親の育児情報源としてのSNS利用に関する調査，大阪教育大学紀要 人文社会科学・自然科学，68，41-49，2020.
18）梅田弘子・島谷智彦・長沼貴美：乳幼児を育てる共働き家庭の家族機能の特徴―夫婦それぞれの評価に着目して，広島国際大学看護学ジャーナル，14（1）57-67，2017.
19）青木聡子：幼児をもつ共働き夫婦の育児における協同とそれにかかわる要因：育児の計画における連携・調整と育児行動の分担に着目して，発達心理学研究，20（4）382-392，2009.
20）野澤義隆・大内善広・萩原康仁：サポート活用効力感の相異によるソーシャル・サポートの育児ストレスへの影響の検討，心理科学，40（1），1-12，2019.

育てにくさを抱える保護者への臨床心理学的支援について

Clinical Psychological Support for Parents who Have Childrearing Difficulties

小柳　菜穂・橋本　創一・前田　詩奈・田中　里実・田口　禎子・堂山　亞希
秋山　千枝子

KOYANAGI Naho*[1], HASHIMOTO Soichi*[2], MAEDA Shiina*[2], TANAKA Satomi*[3],
TAGUCHI Tomoko*[4], DOYAMA Aki*[5] and AKIYAMA Chieko*[6]

特別支援教育・教育臨床サポートセンター

Abstract

This study examined childrearing difficulties based on the supporters' field of activity from the perspective of four factors: (1) children, (2) parents, (3) parent-child relationships, and (4) the environment. Then, the study organized kindergartens' and nursery schools' support for parents experiencing childrearing difficulties to provide clinical psychological support to parents. The results indicated that childrearing problems were caused by children's behaviors related to symptoms of developmental disorders, parents' problems related to isolation, affection, and over information; differences between parents' thinking and children's conditions, parental discord, and being busy. Kindergarten and nursery school teachers perceived that parents experience childrearing difficulties because they lack knowledge on managing children, isolation from the community and other family members, and being too busy. Concrete advice and support for parents about managing children and developing relationships among parents to prevent isolation are essential for supporting parents experiencing childrearing problems.

Keywords: difficulty in raising children, support for parents

Support Center for Special Needs Education and Clinical Practice on Education, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

＊1　Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University
＊2　Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan)
＊3　The United Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University
＊4　Department of Early Childhood Care and Education, Komazawa Women's Junior College (238 Sakahama, Inagi-shi, Tokyo 206-8511, Japan)
＊5　Department of Child Studies, Faculty of Human Sciences, Mejiro University (4-31-1 Naka-ochiai, Shinjuku-ku, Tokyo 161-8539, Japan)
＊6　Akiyama Child Clinic (1F Kawaguchi-building 4-3-3 Kami-renjaku, Mitaka-shi, Tokyo 181-0012, Japan)

要　旨

本研究は，支援者の活動フィールドによって育てにくさの実態について4つの要因から検討し，幼稚園・保育園は育てにくさを感じる保護者に対してどのような支援を行っているのか整理し，臨床心理的な支援を検討することを目的として調査を行った。その結果，幼稚園･保育園では子どもの要因では発達障害様症状の行動，親の要因では孤立や愛情に関すること，情報に振り回されていること，親子の要因では親の思いと実際の子どもの姿のギャップ，環境の要因では両親の多忙や不仲が多く挙げられた。そして，幼稚園教諭・保育士は，子どもへの対処法が分からないことや，地域や家庭での子育ての孤立，両親の多忙などが保護者に育てにくさを抱かせやすいと感じていることが明らかになった。これらの結果から，育てにくさを抱える保護者への臨床心理学的支援として，子どもへの対応の具体的な助言やサポート，保護者の孤立を防ぐために保護者同士の繋がりを作ることなどが考えられた。

キーワード：育てにくさ，保護者支援